ルチャ・リブレ

覆面レスラーのリンク

仲野　美穂
流域システム工学

「メキシコと日本の架け橋」と聞いて、日本においてメキシコを感じる機会を考えてみた。一般的にはタコス・ブリトー・テキーラなどの食べ物やインカ・マヤ・アステカ文明の遺跡、サボテンがたくさんあるというイメージなどがメジャーなものであろうか。そしてメキシコは「プロレス」のイメージも大きい。

メキシコ、アメリカ、日本はプロレス大国である。メキシコではメキシカン・プロレスである「ルチャ・リブレ（Lucha libre）」がサッカーに次いで人気である。スペイン語でLuchaとは闘争、Libreとは自由の意味であり、ルチャ・リブレとは自由な闘争の意味である。16世紀にメキシコはスペインによって征服され、自由を守るために戦った先住民を表現しているという説もある。ルチャドールと呼ばれるレスラーはリング上で戦い、1対1、2対2、3対3がスタンダードな試合形式である。ルチャ・リブレは基本的に全ての選手がリンピオまたはテクニコ（善玉）とルード（悪玉）に別れており、ルチャドールの半数以上は覆面レスラーである。

日本におけるプロレスの歴史について触れておく。1920年代にアメリカよりプロレス文化が入ってきた。戦後、元力士だった力道山がアメリカ人レスラーをなぎ倒す姿に国民は熱狂し、爆発的な人気へと繋がった。その後プロレス団体が細分化し、現在でも多くの団体が活動を継続している。我が国初の外国人レスラーはロメロ・スペシャル（吊り天井固め）元祖のラウル・ロメロ（セルヒオ・ロメロ）とされている、メキシコ人である。その後も多くのメキシコ人レスラーが来日しているが、最も有名となったのはミル・マスカラスである。彼の弟であるドス・カラスなど彼に続き日本で活躍した来日メキシコ人レスラーは多い。多くのレスラーが未だに、修行などの理由で日本とメキシコを行き来し、両国のプロレス文化の架け橋となっている。しかし残念ながら、我が国においてプロレスの人気は下がりつつある。それでも、アントニオ猪木のように政界に進出したりバラエティー番組に出たり、プロレスラーのものまねをする芸人がブレイクしたりと私達の身近に存在していることは間違いない。

さて、日本で最も有名となった外国人レスラーのミル・マスカラスと言えば、その名の通り千の顔を持つ男と呼ばれ、試合の度に異なるマスクで登場して会場を沸かせた。ところでメキシコではマスクは神聖なものとされている。マヤ文明の出土品で印象深いのは翡翠の仮面であろう。目、鼻、口がはっきりと示されているまさに「仮面」の形である。当時王や位の高い人物の埋葬の際に、この仮面をかぶせていたそうである。日本においてもこの「マスク」の文化は存在している。実際、狂言や能、神楽などで「お面」はお馴染みであり、祭りなどでもキャラクターお面が子ども向けに露店で数多く売られているなど、お面は日本文化に根ざした存在である。日本のお面はひょっとこやおかめ、天狗といった「民族面」、神学面や仏面などの「信仰面」、能面や伎楽面の「芸能面」の三種類に分類される。このマスクの文化はメキシコや日本以外にも存在する。中国四川省の伝統芸能である「変面」は国秘としてその技術は守り、引き継がれている。アニメのキャラクターにおいても、マスクはお馴染みである。スパイダーマンやバットマン、仮面ライダーなどのヒーローはマスクをかぶったり変身したりして素顔を隠して人助けに奔走する。このように、「マスク」は二面

性の象徴であり、人間に何らかの力を与えるものなのであろうか。実際、ドス・カラスのマスクは双頭の鷲がモチーフとされており、アステカ文明では機動力に優れた鷲の戦士をイメージしているそうである。

メキシコ実習ルチャ・リブレの観戦を行った。メキシコではＣＭＬＬとＡＡＡが二大ルチャ・リブレ団体であり、筆者が観戦した試合はＣＭＬＬの大会であった。２０１５年２月１７日の昼過ぎにアレーナメヒコ付近をうろついていると、男性がスペイン語で話しかけてきた。その男性は当日の観戦チケットを売るダフ屋であった。当日の会場であるアレーナメヒコ付近では、昼過ぎには既にマスクやフィギュア、ルチャドールがプリントされているＴシャツなどのルチャ・リブレグッズ売り場が立ち並んでいた。ルチャ・リブレ観戦チケットはダフ屋から購入し、日本円にして約１５００円だった。最初の金額よりも値引きしてもらったが、これでも高い方だそうだ。席は正面から１０列ほど後ろであった。（２０１５年３月２９日にカリフォルニア州で開催された世界最大規模の大会、レッスルマニアの席代はリング周りの前から８列は２０００ドル。）観光案内本やインターネットには会場付近はとても治安が悪いといったことが載せられていたが、若いカップルや学生、子ども連れの親子、老夫婦まで会場に来ており、老若男女問わず楽しく観戦していた。帰り道も会場付近はグッズ売り場がひしめきあい、明るく、活気に溢れていた。試合自体も善悪にわかれてキャラクターが設定されているため、プロレス初観戦の筆者でもとてもわかりやすく、楽しむことができた。会場と常に呼応しながら試合が展開され、レスラーと観戦者が一体となっていることが感じられた。

昨今、プロレスファンの女子を意味する「プ女子」という言葉がよく聞かれる。我が国でプロレスブームの再燃の兆しであろうか。筆者もこのメキシコ実習の機会がなければプロレスについて具体的に知ることもなかったが、これまではプロレスというと「痛そう」な競技というイメージがあり、プロレスファンは単なるマニアック集団であり、なんとなく近寄りがたい閉じたものであると思っていた。野球やサッカーに比べ観戦作法がわかりにくく、面白さや醍醐味がわかりにくいというからという理由もある。実際に見てみると善悪にわかれていることや技を決めるために何度も練習していること、そしてそれを感じさせないようなアドリブ感に満ちた試合展開。相手を怪我させないような技かけなどプロレスの奥深さは計り知れない。メキシコと日本の架け橋としてのプロレスが今後も末永く続いていくことを筆者は願っている。

仲野美穂　なかの　みほ

九州大学工学府流域システム工学研究室を 2016 年 3 月に修了　工学修士

１９９２年福岡県生まれ。河川の研究室である流域システム工学研究室に所属し、主な研究として河川からアプローチした地域づくり の研究を行っていた。
上下水道システムメーカーに就職し、現在に至る。